

但馬太郎治傳

但馬太郎治傳

子文六

新潮社版

但馬太郎治傳

昭和四十二年十一月二十五日 印刷
昭和四十二年十一月三十日 発行

定価 四八〇円

著者 獅子文六

発行者 佐藤亮一

発行所

東京都新宿区矢来町七一
株式会社 新潮社
電話東京(廻)一一一
振替東京八〇八番

印刷・二光印刷株式会社
製本・新宿 加藤製本所

但馬太郎治傳

パリの巻

私が二度目にパリへ行ったのは、ヤボ用というのか、家庭の事情というのか、とにかく、学問や芸術と関係ない、外遊だった。一九三〇年のことで、航空事業はまだ発達せず、フランスのM・M会社の船で、ノロノロと、海を渡った。

その時、私は、金がなかった。その前に、パリに長くいた時も、同様だったが、今度も、ラテン区の貧乏ホテル暮らしを、避けられない。部屋なぞは、どうでもいいのだが、南京虫が閉口である。私は、南京虫恐怖症である。以前だって、何度も、ホテルの主人に文句をいうと、これだけは、宿泊人の正当な苦情であるから、主人も、シブ面をしながらも、駆除作業にかかる。部屋の扉や窓に、目張りをして、硫黄ガスを、部屋に充満させる。無論、その間は、別室に移るのだが、荷物を運び出すのが、面倒である。それで、効果があれば、まだ我慢ができるが、あの画鋏に似た平たい虫は、一、二週間もたつと、また、モゾモゾと、体の柔らかい部分を、狙いにくるのである。結局、我慢の外はない。それに、度々食われると、だんだん、腫れも、痒みも、少なくなってくる恩典もないではない。

でも、日本へ帰って、五年間というものは、貧乏暮らしは、変らなくても、あんな虫と同居しないで済んだ。カダの、ノミだのは、子供の時から慣れてるし、第一、何となく、清潔な虫ではないか。南京虫というのは、ツブすと、大変くさいというだけでも、気持が悪い。

それに、私は、日本へ帰った間に、ほんのちょんぶりではあったが、文名が出たのである。原稿料獲得の味も、覚えたのである。もう私は、昔日のラテン区の貧書生ではない——少なくとも、自分では、そう思ってた。パリには知名の士が、よく日本から来遊するが、今度は、自分もその席末を汚すぐらいの量見が、正直いって、ないこともなかった。

そういう気分であるから、南京虫の出る安ホテルは、もう泊りたくなかった。それは、特に、思い上りというわけでもないだろう。あの虫が出るホテルというのは、単に虫が出るばかりでなく、万事が、暗く、汚く、不衛生にできてる。四年間も、そういう所で暮らしたのだから、いい加減、飽き飽きしてしまった。

そこで、今度は、虫の出ないホテル——つまり、高級ホテルに泊れば、何のことはないのだが、前に述べたとおり、金がない。財布の中味は、貧書生時代と変りがない。ただ、量見だけが、ゼイタクになったに過ぎない。

そんな時に、ふと、耳に入ったのが、パリに新設された、日本学生会館のことである。パリ南部の郊外に、大学都市ができる話は、前回の滞在の時に、聞いてたが、そこへ、日本人学生のための立派な設備が設けられたという。そんなことが、昨年あたり、日本の新聞に出てた。日本の留学生専用だから、費用も安く、その点でも、私に向いてると思った。

学生会館と名乗るからは、マジメ人間の世界にきまつてるから、私には、少しニガ手であるが、

近代様式の新築という話だから、南京虫の出ないのは、確かだろう。それに、前回の長い滞在で、パリはサンザン愉しんだから、今度は、神妙な暮らしをするのも、悪くはない。

そして、宿泊費の安いのも、ありがたい。南京虫の出るホテルよりも、もっと安いらしい。
(よし、きめた！)

折りよく、慶応大学の留学生として、友人のIが、その学生会館に、泊ってた。私は彼宛てに手紙を出して、部屋を確保してくれることを、頼んで置いた。

そんなわけで、私がパリのリオン停車場へ着くと、彼が出迎えにきてくれた。

「部屋は、あるかい？」

「うん、いい部屋をとった……」

彼も、日本にいた時は、ヤボくさい、教師風の服装だったが、紺地にストライプのダブルなぞ着込んで、男前をあげてた。

「じゃア、ともかく、一ぱい……」

五年ぶりのパリ再見で、私はウキウキしてたので、駅のカフェへ彼を誘った。そこは、わりと高級であって、日本の駅の食堂と、わけがちがうのである。

私は、水割りのコアントロウを、注文したが、彼は、牛乳入りコーヒーだった。私は彼が下戸だったことを、思い出した。

久しぶりのコアントロウを、いい気持で味わっていると、Iがブッチョー面^{づら}を始めて、話しかけた。
「君、おれは、とても、忙しいんだ」

「何か、用事でもあるのか」

「いや、研究の時間が足りなくて、一分でも、生かして使いたいんだ」

「結構じゃないか」

「もう、留学期限も、残り少ないしな」

「うんと、勉強するんだな」

「だから、君がきても、日本にいた時のようなツキアイは、できないと、思ってくれ……」

彼は、その一言がいたくて、口を開いたのだろう。

私は少しおかしくなった。その頃は、私もまだ、若かった。酒も飲み盛りで、飲めばハシゴになって、キリがなかった。東京で、三田を出た飲み仲間があつて、その連中と一緒にすると、夜を徹するようなことになった。因果なことに、下戸のIも、その連中と親しかった。時には、一緒に引き廻されて、迷惑したのだろう。私の酔態も、彼はよく知ってたのだろう。そういう私が、パリへ着いた途端に、飲み始めたのだから、彼も予防線を張らずに、いられなくなったにちがいない。

「心配するなよ。パリへきたら、個人主義を尊重するから、お前さんを誘い出したりしないよ」

私は笑ったが、よく考えてみると、パリで人からそんなことをいわれたのは、始めてだった。私のパリ友達は、飲みに誘わないという理由で、文句をいう奴ばかりだった。

駅前からタキシに乗って、大学都市へ行くことになった。じきにセーヌ河を渡って、植物園のわきを、イタリ―通りへ走るが、この辺、パリの薄汚いところで、その上、初冬だったから、マロニエ並木も、枯枝ばかりである。

「どんな連中が、住んでるんだい？」

私は、日本学生会館の模様が、知りたくなった。

「いや、みんな勉強家ばかり。君みたいなのは、一人もいないよ」

「それア、わかつてるが、主として、モンリユーか」

モンリユーというのは、パリの日本語であって、文部省留學生の略である。

「やはり、多いが、ぼくのような私大の在外研究員だって、かなりいるよ」

「すると、先生ばかりじゃないか。理屈いっちゃ、ケンカしてゐるんだろう」

「そうでもないよ。館内の交際はほとんどないくらいだ」

「それア結構だ。学者がホーム・シックを起すと、実に厄介だからな。早く日本へ帰ればいいのに、フランスの悪口をいいながら、グズグズしてゐる。少し道楽できれば、すぐ癒^{なほ}るんだが……。」と

「いや、そんなことはない。朝飯だけだ。後の食事は、マズい飯を食わされるのかい？」

「外でって、あの辺に、レストオランなんかあるの？」

「あることはあるが、ロクなのはない。ぼくは、オルレアン門まで、食いにいく……」

「部屋は、どうだい？ まさか、屋根裏じゃあるまいな、学生下宿といつても……」

「冗談いうなよ。あんな立派で、近代的な部屋は、ちょっと、左岸のホテルにはないだろう。暖房

だって、スチームで、暑いくらいだ」

「へえ、すてきだね。暑い暖房なんて、パリでお目にかかったことないよ。おれなんか、石油スト

ーブたいて、暮らしてたんだからな……。じゃア、清潔だろう」

「その点は、保証できる」

「ビュネーズ（南京虫）は、出ないだろうな」

私は、特に、それを確かめたかった。

「ビュネーズ？ そんなものないよ。第一、パリにいるわけがない……」

「何にも知らねえな。まア、いいや。君が一度も、学生会館であの虫に食われたことがなければ、それでいいんだ」

「絶対に、一度も……」

私は、ほんとに安心した。

そのうち、車はオルレアン門の附近へ達した。パリの南の城壁門である。もう城壁は見当らないが、名だけ残ってる。パリの繁昌^{はんじやう}が南へ移る傾向があり、第一次大戦後から、モンマルトルの繁昌が南下して、モンパルナスへ降りてきたが、さらに今度は、もっと南のオルレアン門の方へ移る気配で、その附近は、東京の新宿のようになるのではないかと、噂^{うわさ}だったが、来て見れば、まだ、場末の面影が濃かった。

「もう、直^じきか」

「うん、まだ、ちよいと……」

「ずいぶん、不便なところだな。大学都市だから、仕方ねえけど……」

私は、南京虫は出ても、出端^{でば}のいい所に住んでたから、少し心細くなった。

こんなところに、こんな空地があったかと、驚いたくらいだったが、そこに、パリに珍しい、整然とした一劃^{いっかく}が、できあがってた。パリに珍しい、ビューリタン風な空気と、建物と、樹木があった。

「いやに、清潔なところだな」

私は、少し度胆^{どきど}を抜かれた。

「あれが、アメリカ館、こっちがイギリス館、イタリー館、インド館……」

車の窓から、Iが説明してくれたが、どの建物も、金がかかった高層建築で、そして、新しいわりに、落ちついた趣きがあった。

「さア、ここだ……」

車が止まる前から、私は、目当ての日本学生会館の建物を、それと知った。大変、異色のある建築なのである。設計家はフランスの新しい人と、聞いたが、大いに日本色を出すことに、努^{つと}めたのだらう。つまり、日本の城の外形を、とりいれて、キリヅマが重なっている。確かに、日本館にちがいない。ただ、日本の城の黒と白の色調はない。チョコレートにクリームを混ぜたような、外壁の色である。お菓子の城といったら、いいのか――

運転手に金を払ってから、私は、改めて、建物を仰いで見た。

(今日から、この城に住むのか)

しかし、Iは、城に住み慣れた調子で、私を導いた。入口は、大変広く、ガラスを使ってある。昨今は、東京あたりでも、こんな風なビルビルの入口が多いが、当時は、とても目新しかった。

「おそく帰ってきたらな、このボタンを押すと、自然に扉が開くからな」

Iは、私が深夜に帰宅するものと、きめてるようなことをいった。

「一体、門限は、何時なんだ」

「一応、十二時となっているが、それ以後でも、ボタンを押せば、扉が開くから……」

私は、さすがフランスだと思った。マジメ学生のマジメ世界でも、それくらい自由は、許され

てるらしい。

「でも、女を連れてくることは、厳禁だよ」

I が、すぐ訂正した。

「それアそうだろう。第一、こんなところへ、牝鶏メンドリを連れ込んでも、仕方あるまい……」

「ところが、大胆なのがいたんだよ。会話教師と称して、サン・ミシェル街の女を、自室へ入れてね」

「へえ、モンリ्यूも、なかなかやるんだね」

「それがバレてから、規則がやかましくなったんだ。でも、今だって、サロンまでは、女性を入れても、差支さしつかえないことになってる……」

そのサロンが、入口の左側にあつて、I が内部へ案内してくれた。ちょっとしたホテルのポーチぐらいの広さがあり、ソファやイスの間に、植木鉢が置かれ、ピアノも一台あつた。しかし、ホテルのポーチのような装飾性は、どこにもなく、ただ、フジタの壁画がハバをきかせてるだけだった。恐らく、この広間は、講堂にも兼用できるのだろう。そういった空気だから、ここだけは女性出入の自由があるといつても、利用者は見当らなかった。いや、ガランとした室内に、全然、人影がなかった。

一体、あまり人間の見当らない建物であつて、宿泊人の学生の姿はおろか、館の仕事をする人も、歩いてないのは、午後三時というハンパな時間だからだろう。

「おい、何か、入館の手続きをしなくてもいいのか」

私は、入口から突き当りの辺に、またもフジタの壁画を見出し、それを眺めながら、I にいった。

「いや、大体、ぼくが済ましてある。後で、支配人の室へ顔を出せば、いいだろう」

と、彼は、ノンキなことをいった。もともと、日本学生会館だから、日本人の宿泊人が主人顔をするのが、当然かも知れない。そして、彼は階段下の鍵箱かぎばこから、二つの鍵を持ってきた。

「君の部屋の鍵だ。おれは三階だが、君は二階だ。北向きだが、静かな部屋だよ」

と、何でも心得たことをいって、案内に立った。私も、一つきりだが、日本から持ってきたスーツ・ケースの荷物があり、自分で運んで、階段を登った。南京虫の出るホテルでも、到着の時は、ボーイか女中が、カバンを運んでくれるが、そこが学生会館だと思って、我慢する外はなかった。階段も廊下も広く、清潔だった。廊下の採光も、普通のホテルより明るかった。渡された鍵の番号札で、17号室が割り振られたことはわかったが、その扉の文字を見出すのも、骨は折れなかった。それでも扉を開けると、眩まぶしいほどの光りが、流れてきた。

「どうだ、いい部屋だろう」

Iは、自分の持ち物のように、自慢をしたが、確かに上等の部屋だった。

第一、広い。その上、明るい。窓が新式で、ふんだんにガラスを使い、普通のフランス家屋のカノン開きではない。金具のワクの引きちがえ風である。その点も、日本風家具を模したのかも知れない。北向きなのに、大変な明るさである。その代り、ガラス張りの家に住んでるようで、外から見透し——恐らく、日本人学生が室内で不善を行いに、配慮がなされてるのだろう。

そして、窓際まどぎわに大きなテーブルがあり、イスがある。新しいデザインで、品物も上等であり、勉強するのに好適である。窓の反対側にベッドがあり、その時分流行の低床で、ちよいと腰かけてみたら、スプリングも上等だし、ベッド・カバーの色も単色で、シブく、地質も上等だった。

ただし、額や花瓶などは、一つもない。本箱や衣裳戸棚もハメ込みで、何か、大変ガランとしてゐる。部屋が広く見えるのも、そのせいかも知れない。そして、珍しいことに、ジュータンが敷いてない。磨き込んだ床の木肌が、テラテラと光ってる。安ホテルの部屋でも、半分ぐらいは、敷物に掩われてるが、全然、その影がない。きっと、敷物は埃を吸って、不衛生という考えなのだろう。南京虫は、よく敷物の下に隠れてるが、これでは栖家もないわけである。そして、昨年できたばかりの建築だから、壁紙も、洗面所の金具も、ま新しくった。

「つまり、この建築は、近代的質実剛健というのかな」

と、少し考えてから、私は感想を述べた。

「そして、芸術的でもあるんだ。何しろ、ビクトリアン・サルドオの息子が、設計したんだからな」

I がいった。

ともかく、結構な部屋を獲得して、私は満足だった。その上、部屋代が安い。朝食代を別にしておいて、一ヶ月二百フランぐらいだという。どん底のホテルへでも行かなければ、そんな値段はない。

「今晚は、飯をオゴろう」

私はIの労を謝して、日本人クラブの食事でもしようという気になった。パリの十一月下旬は、もう冬景色で、時間はまだ早いの、窓の外は、薄暗くなつてた。

一緒に部屋を出たが、廊下を歩いてるうちに、

「ちよいと、事務室へ挨拶に寄るか」

と、Iが、一室の扉を叩いた。

しかし、館長は外出中で、副館長というのか、大年増おとしまのフランス女が、応接に出た。もう五十ぐらいいに見えたが、フランスの婆さん特有の肥り方でなく、スラリとした姿勢と、端正な顔と、銀髪と口紅との対比が、小イキでもあった。私が以前に、パリ生活を送ったと聞いて、彼女は遠慮なくフランス語で、しゃべり出したが、この会館の建築費が、三百五十万フランかったこととか、設計者のビクトリアン・サルドオの息子が、いかに卓抜新鋭の建築家であるかとか、大学都市のうちでも、日本学生会館の評判が、他を圧してるとか、そして、彼女自身も、若い時から日本最良ジャポニズムで、そのために、ここへ奉職したのだとかいうことを、生粹きすいのバリ弁で話したが、声にも、表情にも、残りの色香が充分だった。

「あれア、昔、ウグイス鳴かせたね」

と、部屋を出てから、私がいうと、Iも、

「きっと、美人だったろうな。そして、婆さんなのに、まだ、マドモアゼルと称してるんだぜ」

と、答えた。フランスでは、一度でも結婚すれば、マダムというべきだが、あの年でマドモアゼルは、珍奇である。もっとも、少し変った女でなければ、こんなところへ就職はしないだろう。どうせ、高い給料をくれっこないのだから――

「館長というのは、どんな人間だい」

「これア、気のいいオッサンでね。芸術家くずれみたいな男だが、少しは日本研究なぞやってたらしい。アイカイはいかい（俳諧）がどうしたというようなことを、得々として、弁ずるよ」

「外に、フランス人は？」

「朝飯をつくる料理女でも、部屋女中でも、みんなフランス人さ」

「すると、日本人は宿泊人だけか」

「そうだ、全部……」

「これだけの設備で、この安い料金で、申しぶんはないんだが、日本人がいるのが玉にキズか……」
私はニクマレロをきいた。

前回、パリについた時に、ソナムラール街の安ホテルに泊ったが、そこは、日本人の巢のようなところで、勝手がきく代りに、実にウルサイことが多かった。日本人同士のツキアイが、面倒なのである。その生活を、後に「達磨町七番地」という小説に書いたことがあるが、遂にその宿にいたたまれなくなって、日本人の一人もない界隈に移転した経験があった——

そんな量見なら、日本人クラブへ食事になんか、行かなければいい、ということになるが、生来、米の飯が好きなのだから、仕方がない。以前いた時も、日に一度は、シナ飯屋で米飯をつめ込まないと、気がすまなかった。日本人クラブは、少し高価だから、週一回ぐらいで我慢したが、今度は、まだ到着したてで、懷中も暖かい。そして、フランス船に乗ってきたのだから、もう四十日以上、日本食を口にしてないのである。

地下鉄でマイヨー門まで行き、地上へ出ると、もう灯が輝いてた。街の姿は、五年前と少しも変りがなかった。広場から裏町へ曲って、じきに、日本人クラブがあった。

日本人クラブといっても、普通のフランス家屋であって、タタミやカラカミがあるわけではない。小さなビルの地下から三階を借りてるのである。初めてきた人は、通り過ぎてしまうほど、目立たない場所だが、入口に日の丸の旗を出してから、その惧れはなくなった。

一階が食堂、二階が休憩室、三階がビリヤード室——そこで故木下奎太郎が、よく球について